

はじめに

人類と疾病の関わり合いの歴史は、人類の誕生と共に起きているといわれているが、病気そのものは人類が出現する以前の化石動物の中からその痕跡を見出すことができる。

特に疾病と食の関わり合いについて、いつ頃から行われていたかを紐解いてみると、中国の周の時代に遡る。周の国が建国されたとき、この国の法律“周礼”が作られ、この中に医官制度が設けられていた。医官には、食医・疾医・獣医・傷医の4官があり、この時代にもう食養・食療の考えが重要視されていたことをうかがわせる。

一方、ヨーロッパでは『医学の父』といわれるヒポクラテスが「空気・水・場所について」という著書の中で病気と食物及び食養生の重要性について述べている。

このように人間の疾病の大部は有史以前の時代から存在しているとされているが、疾病によっては従来から存在する姿から、人間の進歩に従って大きく変化してきているものもある。

疾病と食の関わりは、古今東西の医学の中で、綿々と続けられている重要な課題の一つであるが、今なお確かな解決方法を見出せないのが現状である。それは高度技術から豊かな社会生活を享受した一方において、ストレスの増加、運動不足や食の飽食化などの要因から生活習慣病を蔓延させて、今日大きな社会問題となってきているからである。

特にメタボリックシンドロームにみられる諸疾患についての指導においては病態医学、臨床栄養学、栄養学、食品学、調理学などの学問をもとにした臨床栄養学実習の技術の習得が重要になってきている。さらに近年の健康食品ブームにみられるように前述の学問では解決できないものもみられるが、それらの多くは伝統的医学、伝統的栄養学の流れに基づく考え方であることが多く、これらの食事療法などの学問の習得も大切である。今後は、いかに患者個人に適した食事治療ができるかが管理栄養士・栄養士にとっての重要な課題になってきている。

ここ数年病院食は大きく変わろうとしている。本書においては多様化した食生活の中で医学管理に基いた治療食をいかに美味しく作るかをキーワードとしたので、臨床栄養学とともにしっかり理解して実習をしてほしい。

平成22年6月

編者一同